作・文と作・ホームページ ＜問題の所在＞

長崎大学教育学部　安河内　義　己

1996年度後期の長崎大学大学院教育学科研究科教科教育専攻国語教育専修の『実践授業研究（演習）』（1996年10月４日～1997年２月７日実施）は、長崎大学教育学部附属小学校第６学年において、ホームページづくりを進めた。

このホームページづくりは、同附属小学校「生活体験学習（総合的な学習）の選択肢の一つ「情報」の第６学年『附属小学校のホームページを作り、多くの人と交流しよう』としてなされたものである。ここに、『実践授業研究（演習）』は、国語科「表現」の『実践授業研究』として、２学期から途中参画させてちらった。

ここでは、この『実践授業研究』をとおして見えてきた現在の作文教育の問題点と今後の作文教育の検討事項、さらには現行の学校教育が抱える問題点及び今後の課題について整理しておく。

１　作文教育の問題点と今後の検討事項

(1)　作文教育の問題点

現行の作文教育の問題点は、結論から先にいえば、いま行われている国語科「作・文」指導論の脆弱さである。それを見えやすくしたのは、国語科「作・文」のこれまでが「作・ホームページ」実践によって照射されることになったからである。これは、『実践授業研究』実施の目的からいえば、望外の成果であった。

以下、その脆弱さの点を整理しておく。

脆弱さ１　書き手の書く目的の設定を必要かつ十分にはしてこなかったこと。

次の事例に見るように、これまでも書く目的の設定を必要かつ十分にしてこなかったわけではない。(1)

・単元「こんなことしたよ『みんなおいでよ　すてきなどうぶつ』」（第１学年）では、「楽しい動物やまわりのようすを作っておもしろかったこと、頑張ったこと、工夫したことを家の人に知らせる」とした。

・単元「作ってあそんだ『すてきだよ、わたしの○○バンド』」（第２学年）では、「楽器やバンドをどのようにくふうして作ったのか、バンドのイメージを考えた工夫はどこか、制作や練習で楽しかったことは何かを、『○○バンドブック』という小冊子の形で、お家の人に知らせる」とした。

・単元「書くことをえらんで書いた『ようこそ楽しいリコーダー発表会へ』」（第３学年）では、「練習の過程でがんばった自分や、友達との教え合いで、リコーダーが上手に吹けるようになったことを招待文に書いて家の人に知らせる」とした。

・単元「組み立てを考えて『わたしが見つけた水のひみつ』」（第４学年）では、「発見した水のひみつを、すでに学習している５年生に伝える」とした。
・単元「わたしはこう考える『心もかがやくクリーン大作戦』」（第５学年）では、「他のクラスの５年生に『もっと学校をきれいにしよう』と訴える」とした。
・単元「文章構成の工夫を『わたしの思いを刀にこめて』」（第６学年）では、「作品を作りあげた感動や作品に対する思いを卒業制作文集として残し、作品では分からない制作中のがんばりを分かってもらい、いつまでも学校に残してもらいたいという願いを在校生に伝える」とした。

この実践研究は、書き手の目的の設定に関しては先導的なもの、と筆者は自負している。だが、これでもまだ、書き手の「書く目的」の設定は必要かつ十分とはいえない。理由は、次のとおり。

理由１　書くことによって何をどうしたいか、何がどうなって欲しいかというところまで、書き手の「書く目的」意識を高めていないこと。

理由２　書き上げることが目的になっていて、書き上げたものが読み手にどう読まれるか、読まれることによって何がどうなるかについては、まだ書き手の考慮の外にしかないこと。

理由３　その意味では、書くこと自体が、何ごとかをするための手段としてまだ十分機能していないこと。

脆弱さ２　表現する相手の設定を必要かつ十分にはしてこなかったこと。

先の事例に見るように、確かに、一見、表現する相手を必要かつ十分に設定してきたかのように見える。しかし、それは、書き手が、一方的に、自分の表現の受容者になって欲しいという願望によって選定、設定したのであって、自分の表現の受容者である読み手への具体的な要求（単に読んでもらってそれで終わりというのではなく、読んでもらうことによってああなって欲しい、こうして欲しいという、読み手への具体的な注文）あってのことではない。その点では、事例中の「第５学年」の単元は、「他のクラスの５年生に『もっと学校をきれいにしよう』と訴える」とあって、読み手への具体的な要求がなされているようである。しかし、これとて、本気でそれを願うというのならば、清掃意識はどうか、清掃行動はどうかなど、相手（他のクラスの５年生）分析が要る。そうすることによって、やっと表現する相手の設定は必要かつ十分となるのだから。

脆弱さ３　表現媒体を文字言語の操作にのみに限ってきたこと。

ひとことでいえば、マルチメディア化することへの発想と工夫が乏しいのである。先の事例でいえば、各学年の単元すべてにわたって文字以外に絵、イラスト、楽譜、図、地図（掃除区域図など）、写真等の表現媒体（メディア）の使用を大幅に採り入れようという発想がない。だからその工夫も見られない。これは、読み手にどう読ませるか、読み手はどう読むかという視座からの表現法の発想が、筆者も含めて指導者の側にまだ未熟だからである。

脆弱さ４　表現過程をアナログ的な過程だけにしていたこと。

指導に当たった私たち（筆者と院生）は、取材→構想・構成→叙述という過程を、ホームページ作りの過程の基本として第６学年に臨んだ。しかし、すぐにこれが適切ではないことが判明する。彼らは、取材→構想・構成→叙述という段階にはまったくこだわらず、着手しやすいとこからならばどこ

からでも手をつけていった。ホームページのページの枠組みをまず作る。それで、その中身には何を書くかと聞けば、それはいまから考えるというぐあいにである。このような書けるところから書くという発想は、いままでにもなかったわけではない。例えば、結末にはこんな言葉を使う。そこで、そこに向けて一遍の作品を書き上げるというように。しかし、それは、物書きの手練のやる、特殊な書き方であって、作文教室にはなじまない表現過程としてきたのがいままでの作文法である。だが、ホームページ作りは、このことを容易にするばかりか、そうでなければよく作ることができないという、これまでの「作・文」には見られなかった問題提起をした。

脆弱さ5　それでもやっぱり作品主義に陥っていること。

かつて作品主義といわれたとき、それは、書き手と指導者ともどもが、要するに作品ができればそれでよしとして、その過程で書く力のどんな具体を身につけるか、つけさせるかについては、これを学習意識、指導意識に的確に載せなかったところにあった。書けば自ずと力もつくという、確かにそういう面も書くことにはあるのだが、それにしても牧歌的、楽観的な作文指導観に立っていたのである。行事作文といわれたり、書くための時間は作文教室にはなくて作品の提出のみがいわれたりと、これらのことはいまでも作文教室がかかえる問題点である。しかし、ここに言う作品主義とは、そのレベルのことは脱したうえで、なおかつ作文教室がかかえるところの問題点である。したがって、このことは、先の先導的実践研究とした作文単元事例にもいえることであって、次の二つがある。

① 書くことが自体が目的となっている。書くことが手段となっていない。今回の『実践授業研究』の事例に即せば、「附属小学校のホームページを作り、多くの人と交流しよう」というように、「多くの人と交流しよう」というその手段として「ホームページ作り」はあったのである。

②「書き上げる」、「書き終わる」という用語で以て作文を終結させてきたのがこれまでの作文教室である。しかし、今回の『実践授業研究』事例に即せば、「書き上げ」「書き終わ」ったそれをインターネットに立ち上げたその時点が、即、アクセスされた情報にいかに対応するか、ホームページ作りの第二のスタートとなる。アクセスされる情報に終わりはない。ということはホームページ作りにもまた完結を見ることはない。つまり、でき上がりの作品自体が存在し得ないということである。

(2) 作文教育の今後の検討事項

以上の「脆弱さ1」～「脆弱さ5」を、どう克服していくかについて、現時点での打つ手あるいはその方向について、これを今後の検討事項として整理しておく。

検討事項1　書き手の「書く目的」の設定を必要かつ十分にするために、学習者の自己表現・自己実現の場を広く求めること。このことを、単に、作文教室のこととするのではなく、学級づくり、学年づくり、学校づくり、地域社会との連携づくりの一環としてとらえる。つまり、書くために「書く目的」を後からくっつけるのではなく、まず書くことを必要とする目的が先にあって、それを受けて書くことが設定されるという書く場の状況設定を進める。そうしなければ、学習者の自己表現・自己実現の場がにせものの場となってしまう。にせものの場では、書く目的の設定を必要かつ十分にすることはできない。

検討事項2　表現する相手の設定を必要かつ十分にするためには、表現する相手の側からも「書く目的」の策定を進めること。そのためには、相手を組み込んでのところで自分がどうなりたい、どうし

たいという、自己実現がなった時点の具体的な姿を想定し、予定するという学習の場を作文の学習過程に組み込む。

検討事項3　表現媒体を文字言語の操作のみというところから開放するためには、次の視点をもつこと。(ここでは、ホームページ作りの立場で述べておく。)

視点1　何について表現の工夫をするか	視点2　どんな観点から表現の工夫をするか
1　表現目的について (1)　主として見るものとするか。 (2)　主として聞くものとするか。 (3)　主として読むものとするか。 (4)　①～③の組み合わせとするか。 2　表現方法について (1)　リンク化について ①　いくつにするか。 ②　どこからどこへとするか。 ③　どのレベルまでとするか。 (2)　画面構成について ①　何をどこにおくか（平面構成)。 ②　何をいつ表示するか（時間構成)。 ③　何をどう表示するか（立体構成)。 i　できあがりの表示 ii　できあがり過程の表示 (3)　表示方法について ①　どの表現媒体を使うか。 i　片仮名　平仮名　漢字　ローマ字　外国語　混合　表記号 ii　語　句　文（叙事文、説明文、描写文、会話文）　文章（ジャンル） iii　絵　写真　画像　音　音声　音楽 ②　どんな工夫をするか。 i　大きさ　形　彩色　デザイン ii　表示する位置　動き	1　情報を届ける相手のアクセス意欲を高めるために (1)　アクセス心アップをはかる。 ①　アクセス心の喚起のために ②　アクセス心の強化のために ③　アクセス心の継続のために (2)　役に立つ度（相手の目的にかなう度）のアップをはかる。 ①　ページを開いてもらうために i　欲しくなる情報があるか。 ②　アクセス度のアップのために i　質問したくなる情報か。 ii　補充したくなる情報か。 ③　新情報提供度のアップのために i　情報の有無を提供したくなる情報か。 ii　情報のありどころを提供したくなる情報か。 iii　情報そのものを提供したくなる情報か。 2　情報を創る意欲を高めるために (1)　情報を創るおもしろさ度のアップをはかる。 (2)　情報を客体化するおもしろさ度のアップをはかる。 (3)　表現方法の多様化、言語化することのおもしろさ度のアップをはかる。

検討事項4　表現過程をアナログ的な過程だけにしないためには、デジタル的過程をもっと大胆に採用すること。それは、単に表現過程のデジタル化に止まらない。取材活動のデジタル化、構想・構成活動のデジタル化、叙述活動のデジタル化など、それぞれの表現活動自体をもデジタル化するのである。筆者の実践によれば、例えば取材活動のデジタル化を次のように進めている。(2)

単元「心をみつめる」(生活文を書く) 中学校第2学年

目標1　生活文を書かせることによって他者と自己との関係を深く認識させる。

2　生活文を書く力として次の三つを養う。

①　日常生活の中から本質的な題材をえらぶ力。

②　構想を工夫する力。

③　事実を具体的に生き生きと描写する力。

計画1　単元の学習目標・学習計画をたてる。……1時間

2　日常の生活の中から自分の心を揺り動かした事実をいくつか見出す。……

⋮

3　その事実を具体的に生き生きとくわしく書く。……6時間

4　場面の組み合わせを考える。……1時間

5　作品を仕上げる。……1時間

6　本質的なことをえらんで書いたかどうかの吟味をする。……2時間

7　文集にして読み合う。……1時間

＊　参考作品を読む。(2時間)　　＜計14時間＞

取材活動のデジタル化をはかったところは、「計画2・3」のところで、ここで「目標2①」の達成をはかっている。具体的には、6時間を使って、自分の書けるところから取材活動を進める。例えば、具体的事実が5つあるとする。その5つを順を追ってではなく、書けるところから文にしていく——具体的事実1の会話部分を書いたら、次には書けるようになった具体的事実3のバスの中の描写部分を書くというように、書き継ぐというよりはできる部分から書き埋めるという方法で——のである。当然、多種の取材カードが活用される。「細かいところまで思い出すのに苦労したがおもしろかった。書いているうちにつぎの考えがどんどんうかんできてものすごくまとめにくかった。」という学習者の感想がある。アナログ的に進めると一箇所で詰まればその先はまったく進められない。だが、デジタル的に進めれば、一箇所で詰まっても、そこは放っておいて他の部分に手が付けられる。それがこういう感想となったのであろう。

検討事項5　それでもやっぱり作品主義に陥っているということからの脱皮をはかるためには、作文すること自体が書き手の目的となる作文、作文すること自体は書き手の目的達成の手段としかならない作文、というように作文を目的作文と手段作文の二種に分別するようにしたらどうか。そのうえで、手段作文への取り組みの場ができるだけ多くなるように年間計画を策定する。さらに、そのうえで、目的作文と手段作文の関連を密にする——よりよい手段作文の展開のために目的作文の有効な位置づけをするなど——作文学習指導の構造化を進める。

2　学校教育の問題点と今後の課題

以上、「1　作文教育の問題点と今後の検討事項」で見たことは、国語科の作文教育のみが抱える「問題点と今後の検討事項」ではないこと、御賢察いただけよう。折も折、この1997年度は21世紀の教育構想がいよいよ煮詰まってくる時期である。多々ある懸案事項の中でも、とりわけ学校が教育における果たす役割をどのようなものとして考えていくことにするかについては、相当に振幅の大きな変革が期待されもし、また、構想されもしている。しかも、このことは、各学校の当事者、各教室の当事者であるそれぞれが、それぞれに発想し、構想していかなければほんものとはならないという性質のものである。そこで、筆者のもくろみとしては、その発想、その構想を練る際の観点の一つに、以下のことが供されることがあれば、その具体のいくつかはさっそくにも1997年度の教育計画として陽の目を見るに違いない、と予感している。

(1)　学校教育の問題点

問題点1　作文教育がもつ脆弱さ1・2・5のことは、学校教育が学校という塀の内にあろうとしすぎるところに根をもつ。これまでの学校教育は、学習者をその日常から隔離し、純粋培養のやり方で学習を進めることにより、その成果を上げようとした。このやり方の問題点は、何のための学習か、学習者が納得する学習目的が、学校という塀の内にはなかなか求めて求められない（リカレント教育の実施がなされれば別だが）ところにある。学校は、学校を囲む塀を名実ともに取り外し、そのキャンバスを社会と共有しよう。

問題点2　作文教育がもつ脆弱さ2・3・4のことは、学校教育が単線型、直線型の学習制度（就学制度については問題点1に含めておきたい）からなかなか抜けきらないところに根をもつ。例えば、脆弱さ2・3のことは、他の教室、他の学年、他の諸学校、他の諸学習団体、他の諸教育団体と連携する学習がないところに起因している。また、脆弱さ4は、紆余曲折型・試行錯誤型の学習を否定したところに起因している。

問題点3　作文教育がもつ脆弱さ1・4のことは、学校教育が学習者の自己実現を先送りさせているところに根をもつ。少なくとも学校という場は、学習者の自己実現に向けての準備の場ではあっても、自己実現する場ではない。学校での学びの時期というものは自己実現の時期にあらず、その準備の時期である。こういう教育観で学校教育が展開される限り、この問題点は払拭されないであろう。

(2)　今後の課題

課題1　問題点1をクリヤーするためには、豊かな社会における学校教育は、そういう社会との間に高い塀を設けるべきではないとすること。逆に豊かな社会の教育力を積極的に活用すべきである。今回のホームページ作りの事例の場合、小・中・養護・大の各学校と教育センターの教師が、また、小学生・大学生・一般人・事例学校の保護者という数多くの人々がアクセスしてきている。これらの人々の要望に応えることがいかに大きな学習の成果をもたらすことになるかは、容易に想像できることである。

課題2　問題点2をクリヤーするためには、学校教育が複線・複々線型、紆余曲折型・試行錯誤型の学習制度を採ること。これも豊かな社会にある学校教育だからこそ許される。因みに、豊かな社会とは、かつては富国強兵、いまでは経済立国の戦士の育成を学校教育が担うというような、その社会が

立ち至った緊急かつ回避できない問題を、本来それは学校教育の場に持ち込まれてはならないとわきまえていながら、それでも止むを得ず学校教育にその解決を求める、そのようなことをしないでよい社会である、としておく。

課題3　問題点3をクリヤーするためには、学習者にとって学んでいるこの学びの場こそが自己実現の場、学んでいるいまの時期こそが自己実現のときだと実感される、そういう場と機を学校教育は提供すること。これもまた豊かな社会にある学校教育であればこそできることである。小学校時代は中学校の、中学校時代は高等学校の、高等学校時代は大学や就職への、大学時代は就職への、就職すれば管理職への、そしてやがては老後へのと、学習者にとってのいまが常に明日のための準備として位置づけられる、そういう学校教育の基本原理は、もう豊かな社会にふさわしいものに取り替えられてよい。

注(1)　『平成7年度　研究のまとめⅠ』（福岡県春日南小学校）に拠る。研究主題「豊かに表現できる子供を育てる国語科作文指導～取材が生きる文章構成活動を中心に」の追究と達成に筆者も関わった実践である。

(2)　1975年6月期、福岡教育大学附属久留米中学校第2学年2組にて実践。『福岡教育大学教育学部・附属中学校研究紀要』第4号18頁（1975年11月刊）を参照されたい。